

降臨節第2主日

2010/12/5

聖マタイによる福音書第3章1節~11節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の降臨節第2主日、そして次の第3主日は、毎年、主の道を整えるためにイエスさまに先立って人々に悔い改めを説いた洗礼者ヨハネから学ぶことになっています。ヨハネを通して、わたしたちもイエスさまをお迎えする準備をするのです。

ヨハネは、祭司ザカリアとその妻エリサベトの子どもとして生まれましたから、本来は祭司の仕事を受け継いで、父ザカリアのように神殿で祭司の務めを行うことが期待されたでしょう。しかし、ヨハネは荒野で呼ばれる声として、救い主の到来を人々に告げたのでした。

ルカ福音書によれば、ヨハネが誕生したときにザカリアは賛歌を歌って預言をしました。その中で、「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである」と、ヨハネが成長した暁には、どのような人物になるか、そして、どんな使命を果たすことになるかを語りました。

その預言の言葉通り、ヨハネはヨルダン川流域の荒野に登場したのです。その姿は都の人々とは異なって、らくだの毛衣を着て腰には革の帯を締めていたと描写されています。また、口にしていたのはいなごと野密であったとありますが、これらは遊牧民や貧しい人々の食物でした。ヨハネは町を離れ、質素で禁欲的な生活を送っていたのです。

このヨハネの出で立ち、昔の預言者エリヤを彷彿させるものがありました。エリヤもまた、毛衣を着て、腰には革の帯を締めていたことが旧約聖書には描かれています(列王記下 1:8)。人々はその姿から、「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす」という預言者マラキの言葉を思い起こしたであろうことは、十分に考えられることです(3:23)。

ヨハネが行ったことは洗礼運動です。ヨハネ以前にも、洗礼は行われていました。その点から言えば、洗礼はヨハネ独自の専売特許ではありません。ユダヤ教においても清めのための沐浴が行われていました。死海文書が発見されたクムランにはエッセネ派というユダヤ教のグループが共同生活を送っていましたが、その遺跡からは沐浴のための設備の跡が発見されています。穢れを洗い、魂を清めることが重要な儀式として行われていました。洗礼者ヨハネは、このエッセネ派と何らかの交流があったかも知れないと推測されています。

また、異邦人がユダヤ教に改宗するときにも洗礼を受け、割礼を受けることが必須の条件とされました。その手続きを通して、神の民に加えられたのです。ユダヤ人はアブラハムの子孫ですから、生まれながら神の民の一員として認められたのです。神の民となるために、洗礼は受けなくても良かったのです。

ユダヤ教だけではありません。世界の多くの宗教が水で洗い清めることを行います。日本でも神社に行けば、まず、手を洗い口をすすいでから拝殿に向かいます。神官は神事を行う前には、齋戒沐浴して身を清めます。イスラム教でも礼拝

所に入る前には、身も心も清浄にしてから、アツラーの前に立つのです。水が清めのために用いられるのです。

それでは洗礼者ヨハネの洗礼運動の特徴はどのようなものでしょうか。それは「悔い改めに導くため」の洗礼と言われています。ヨハネが人々に告げたのは、「悔い改めよ、天の国は近づいた」というメッセージでした。そして、「悔い改めにふさわしい実を結べ」ということでした。そのためにヨハネは人々をヨルダン川の中に沈めたのです。

沐浴は自分で行います。自分から水の中に入るのです。しかしヨハネによって洗礼を授けられた人々は受け身なのです。ヨハネによって沈められたのです。ヨハネの洗礼は沈めることです。それで、「沈める」を意味する言葉から、バプテスマのヨハネ、「沈め男」ヨハネとあだ名されるようになりました。

ヨルダン川の流れの中に全身を浸されることは、それによって水の中で溺れ死ぬというイメージを与えることとなります。ただ単に沐浴して洗い清めることとは全く異なった印象を、人々は深く抱いたのではないのでしょうか。「死んだものは、罪から解放されています」とパウロは言っていますが(ロマ 6:7)、ヨハネの洗礼が死のイメージと結びつくことで、人々は洗礼を受けることによって罪が赦されることを確信したのではないのでしょうか。(『洗礼と水のシンボリズム』)

ヨハネのもとには多くの人々がやって来ました。その中にはサドカイ派やファリサイ派の人々も大勢いました。ヨハネはその人々を糾弾し断罪する説教をしています。彼らはヨハネが呼びかけたから、その言葉に「なるほどその通りだ、自分も悔い改めなければいけない」と心を動かされてやって来たのです。

ところがヨハネは、彼らに向かって「蝮の子らよ」とか、「差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」とか、「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」というような手厳しい言葉を投げかけるのです。それほど深く、抜け出ることが絶望的な罪の虜になっていると指摘するのです。罪の本性は、間違いを犯したから悔い改めてやり直せば良いという、そんな生やさしいことではないと警告するのです。神さまの怒りを引き起こしている、その怒りの前に何をしたらよいかを問うているのです。言い換えれば、悔い改めるとはどのようなことをかを問うているのです。

わたしたちも、悔い改めなければならないことを知っています。何故なら、直さなければならぬ悪い習慣や、心の中に巣くっている悪い思いで悩まされることが、しばしばあるからです。他人のことを羨んだり妬んだり、嘲ったり馬鹿にしたりする心に、我ながら呆れてしまうことがたびたびあるからです。そのような自分の中にある悪い部分を良い方向へと改めることが、悔い改めでしょうか。

或いは、わたしたちは悔い改めてはいるのだけれども、ヨハネが言うように、まだそれにふさわしい実を結ぶことが出来ていないから、これからは実践をしなければならない。実践をして信仰的にも飛躍的に成長していこう。社会の様々な場面で苦しんでいる人々の友となっていこう。そのように行って、今、まだ自分に不足しているところを補って、神さまのお求めになっているレベルに達するように溝を埋めなければならない、ということなのでしょう。

ヨハネが告げた悔い改めは、そのような中途半端なものではないのです。もっと

根本的な悔い改めがなければ、迫り来る神さまの審きをだれも逃れることは出来ない、神さまの要求は徹底したものであることを示すのです。

神さまがお求めになっておられる根本的な悔い改めとは、わたしたちが自分の心の中を覗いてみて、自分では手に負えない悪いところ、困ったところがあるな、と認識することではありません。そうではなくて、自分は悪者だと知ることです。自分の中にも罪の穢れがうごめいていると省みることではなくて、罪人である、罪人そのものであると告白することです。

ユダヤ人は、自分たちはアブラハムの子孫であることに誇りを持っていました。そこにアイデンティティを求め、救いの保証としたのです。しかしヨハネは、神さまは、その辺に転がっているつまらない石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことができになると言って、血筋は救いの保証とはならない。根本的に悔い改める以外には神さまのお求めに応える道はないと断言するのです。

自分を生粋のユダヤ人であると言ったパウロは(フィリピ 3:5)、同時に、「わたしは、その罪人の中で最たる者です」と言っていますが(特モテ 1:15)、それと同じ認識があるか否かが問われているのです。パウロはほかの箇所でも、「正しい者はいない。一人もない」と言っていますが(ロマ 3:10)、罪人として自分を理解し、その自己を否定する叫びを発することこそが、悔い改めでなければならないのです。神さまがお求めになるものと、人間がそれをどのように理解するかということの間には、いつも決定的な食い違いが起こるのです。ヨハネはそのことを分かっていたから、厳しい言葉で迫ったのです。

新しい聖歌集には載録されなかったのですが、古今聖歌集の369番の聖歌はしばしば歌われたものの1つでした。「我、罪人の頭なれども、主は我がために命を捨てて、尽きぬ命を与えたまへり。」先程の、パウロの言葉をもとにした歌詞です。

ヨハネは、「わたしの後から来る方は、聖霊と火で洗礼をお授けになる」と言いました。イエスさまのもたらす火は、罪人をその中に投げ入れ、焼き尽くし、滅ぼすためのものです。わたしたちはその火で焼き尽くされてしまうのでしょうか。そうではありません。「主が我がために命を捨てて」くださったのです。イエスさまご自身が自らを火の中に投じてくださり、わたしたちを神さまの前に立つのにふさわしいものとしてくださったのです。それにより、石ころのようなわたしたちを神の子として、「尽きぬ命を与えて」くださったのです。そのためにイエスさまは来てくださいました。このお恵みの中に立つのです。そうしてこの降臨節を過ぎて参りたいと思います。